「こどものまち」にみる郷土獲得の可能性－高知県高知市「とさっ子タウン」を事例に－

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 花輪 由樹, HANAWA Yuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/0002000576

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

「こどものまち」にみる郷土獲得の可能性

―高知県高知市「とさっ子タウン」を事例に―

花輪　由樹

The Possibility of Acquiring “Home Province” in “Child’s Town”：
Focusing on “Tosacco - Town” in Kochi City

Yuki HANAWA

１．研究背景と目的

1979年よりドイツのミュンヘンで始まった子どもが都市を創る「遊びの都市ミニ・ミュンヘン」に類似する活動は、世界中に広がった。日本においても1997年に高知県香北町で「ミニ香北町」が一時的に開催され、2002年より千葉県佐倉市で「ミニさくら」が継続実施されると、「こどものまち」として各地で開催されていくようになった[1]。2023年時点では全国300地域ほどでの開催が、主催者による情報交換サミットで確認されている。また、ここでは子どもたちが、好きな仕事をして給料をもらい、その通貨で「まち」にある好きなモノ・サービスを購入したり、過ごしにくさがあればそれを市民集会や市議会などに提案したりすることで、自分たちの居る場所をより良く改善していく「職業活動・消費活動・市民活動」が行われている。

本研究は、このように広がる「こどものまち」が継続実施されて20年ほど経つ地域もある中で、2009年より開催されている高知県高知市の「とさっ子タウン」に注目し、対象年齢を過ぎても経験者がサポーターとして戻ってくるのはなぜか、彼らにとって「こどものまち」はどのようなものとして現れているのか、「郷土」という切り口から探ることを目指した。そこで、コロナ前2019年とコロナ後2023年に実施した、スタッフへのインタビュー調査と実態調査よりその状況を探った。

２．現代社会における「郷土」の意味

『広辞苑』(2018)[2]によれば「郷土」とは、「生まれ育った土地」と記されるが、ドイツの教育学者エデュアルト・シュプランガー（1882-1963）によれば、生まれ育った土地から遠く離れても郷土をつくることができ、「人間はどこに生きていても環境（Umwelt）を持つが、必ずしも郷土は持たない」「土地に生じている自然的、精神的なものと内的に離れられない関係にあるところでのみ、郷土を持つ」と示されている[3]。

現代は進学や就職、結婚、転勤などライフステージによって住む場所が変わる機会が多くある。このような移動社会においては、どこに自分の住む場所を定めたとしても、その場所に頼ったり、頼られたりしながら、自分なりに「郷土」を見つけていくことが求められる。本稿にみる「こどものまち」では、どのような「郷土」が獲得されているといえるのだろうか。

３．高知県高知市「とさっ子タウン」にみる経験者の継続的参加

３-１　「とさっ子タウン」の概要

「とさっ子タウン」は2009年より開催されており、小学校４年生から中学校３年生を対象に夏休みの２日間行われる。参加者は２日間で1000円の参加費を払う。主催は、「とさっ子タウン実行委員会」「高知市市民活動サポートセ

令和５年10月１日受理

ンター」「NPO高知市民会議」「公益財団法人高知市文化振興事業団」である[4]。ここでは実行委員会が具体的に企画運営を行っており、（1）だんどりユニット、（2）営業ユニット、（3）よろずユニット、（4）くいしんぼユニット、（5）こうてやユニット、（6）学生ユニットの６分野に分かれて準備が行われる（コロナ禍を経た2023年は学生ユニット休止中）。そして、当日の「とさっ子タウン」には、①専門家スタッフ、②当日スタッフ、③実行委員会スタッフが集結し、②③は高校生から参加することができる。中には小学校４年生から中学校３年生まで子ども側として参加し、翌年から高校生としてボランティア側にまわり、その後専門家スタッフとしてステップアップして関わり続ける人もいるようだ。

「とさっ子タウン」の主催者によれば、ここは子どもに貴重な体験をさせるだけでなく、大学生等をターゲットとして若者も育てようとしている[5]。したがって実行委員長・副実行委員長も大学生世代の若者が担当し、大人は主に裏方としてサポートしていく。「子どもに貴重な体験をさせる場」をどうサポートするか、「当日ボランティア」や「実行委員」の若者達に考えてもらい、大人は若者達がどうしたらそのような場を企画し実行できるか見守る役をしている。これはバウムクーヘンのような年輪の構造になっており、徐々に下の世代がスタッフとして参加してくるようになると、外側ポジションに移行していくことになる。したがってこのような構造があることで、高校生から大人までの幅広い年齢層の人々がスタッフとして参加できるといえる。

３-２　2019年度の様子

2019年度は８月17日、18日の２日間、400名を対象に開催された（図１）。経験者12名（高校生６名・専門学校生及び大学生６名）に、スノーボールサンプリングによる半構造化インタビューの調査を行った[6]（表１）。これによればスタッフとして参加しようと思った動機として、子どもの頃に経験した場に再度関わりたいという者（スタッフA，C，F，K，I）や、実行委員の人が着用できるオレンジＴシャツを着てみたかった者（スタッフA，I）や、スタッフの大人達から学びたいことがあると思っている者（スタッフB，I）がいた。就職や進学などのタイミングで高知を離れ、当日のスケジュールが合わない場合は、継続して参加し続けることが難しくなるが、次回も「参加したい」

図１ 2019年度の「とさっ子タウン」ポスター

図２ 2023年度の「とさっ子タウン」ポスター

表１　2019年度「とさっ子タウン」スタッフへのインタビュー

属性			Q1.子どもの時、いつ参加したか。	Q2.なぜスタッフとして参加しようと思ったか	Q3.来年も関わりたいか
1	スタッフA	高3・女	小5～中2	昨年当日参加のボランティアで参加した。今年は実行委員を希望した。子どもの時に、オレンジTシャツのお兄さん・お姉さんと地元のマチみたいに、「何して遊んだがぁ？」と聞いてくれて、そちら側になれたらたと思っていた。学校のボランティア募集で「とさっ子タウン」が載っていた。自分が楽しかった分、自分の代で終わるのではなく、繋ぎたいと思った。	参加したい。進学先が県外になっても帰ってくる。
2	スタッフB	大1・女	小4～中1	高校時代にスタッフとして関わった時に、「とさっ子タウン」がやっぱり好きだと思った。熱量の多い大人にも会えるし、子ども達とコミュニケーションができる。自分のためにもなるし、他の人のためにもなる。NPOの大人がサポートしてくれるけど、既存の枠にとらわれず、自分達でできることをやっていきたい。社会人になっても関わり続けたい。	参加したい
3	スタッフC	大1・女	小4，5	自分が小さい時に行っていた場所がまだ残っていると思った。そこに関わってみようと思った。このイベントが利益のためにやっているわけではないと思っていた。何のために、どんな方針でやっているのか分かって、そういうことを一生懸命やっているイベントだと知った。実行委員長や副実行委員長を中心にまわっていて、同じ学部の先輩などがやっていてすごいと思った。	参加したい
4	スタッフD	大2・女	小３～中３（2009年２月のプレも来た）	現在は県外の大学にいるが、ずっと「とさっ子タウン」に来ていて、ここに来ることは夏の1つの決まりだった。大学に行っても関わり続けている人達の存在を知って、実行委員会に関わっている人も知っている。高校1，2年生の時は当日ボランティアで参加し、高校3年生の時と昨年の大学1年生の時は、実行委員会の一員として関わった。	難しい。（インターンシップに参加しないといけないため）
5	スタッフE	高2・男	小4，5、中1～3	中3の終わりに来年はスタッフとしてやりたいと思った。参加できなくなるのが嫌だと思った。「とさっ子タウン」で出会った友達も来年も来たいと言っていた。昨年の高校1年生の時には当日ボランティアとして参加し、今年は実行委員会に入って参加した。	参加したい。これがきっかけになり、子どものために何かをしたいと進路が変わった。
6	スタッフF	高2・男	小4～中3	昨年の高校1年生の時には当日ボランティアとして参加し、今年は実行委員会として参加した。自分が子どもの頃から参加してきた側で「とさっ子タウン」が忘れられないし、子どもの面倒を見たいと思った。	参加したい。進路は県外だが、スタッフとして関わり続けたい。
7	スタッフG	高1・女	中1～3	これまで参加者側として3年間来ていたので。このイベントが2日間で千円で運営できているのがすごいと思った。それもスタッフのおかげだと思った。	参加したい
8	スタッフH	高1・女	小4～中3	市民の時にもっとこうしてほしいという目安箱があり、そこに入れたかったが入れ方が分からなくて自分で考えていたら、スタッフの人が教えてくれた。帰る時もスタッフの人が手をふってくれるのがうれしかった。高校は忙しいので当日ボランティアだけの参加だが、大学生になったら県内の予定なので実行委員会に入りたい。	参加したい
9	スタッフI	大2・女	小３～中１（2009年２月のプレも来た）	昨年は当日ボランティアとして参加し、今年は実行委員会に入って参加した。子どもの頃は、大学生と大人達が企画しているイベントというイメージがあった。オレンジTシャツを着たいと思って、憧れていた。自分達がやってもらったことをやる側にまわりたい。楽しかった想いがある。実行委員の人達も楽しそうに活動しているのを子どもの時に見た覚えがある。昨年、大学生になったので、今までやりたかったことをやろうと思い、「とさっ子タウン」のボランティアに参加した。参加してみて、高校生スタッフも多く、年齢が違う人とも話せる場だと思った。年齢層が広く、大人からも学べる。同じ目的をもって、同じ空間にいる。困ったことがあると相談もできる。実行委員は色んな人と一緒に、当日の2日間に向けて1年間やっていく。最初は当日ボランティアで参加したので、当日の動きしか知らなかった。でも今は実行委員として準備段階から参加していて、今は私なりにできることが見えてきている。	参加したい（就職活動の状況による）
10	スタッフJ	大3・男	（小5）	別の「遊びの都市」の出身だが、小学校5年生の時に「とさっ子タウン」に遊びに来た。大学進学で高知に来て、大人スタッフに誘いを受けた。	参加したい
11	スタッフK	高3・女	小5，6	昨年の高校2年生の時に当日ボランティアとして参加し、今年から実行委員に入って参加した。こっちの裏方側もやってみたいと思って参加した。姉が実行委員に入っているというのもあった。	参加したい。県外に進学してもスタッフとして関わり続けたい。
12	スタッフL	専2・男	小4～中3	高校1年生～3年生、専門学校2年間と、計5年間スタッフとして参加してきて、ここに毎年来ることに慣れている。親が実行委員に入っているというのもあり、必然的にここに来ていた。中学校1年生の子どもの時から段ボール工場で働いていて、スタッフとしてもここに関わり続けている。	難しい（就職してしまうため）

『令和元年度山梨県大村智人材育成基金事業 報告書』より筆者加筆修正

意思をもつ者が大多数であった。

「こどものまち」活動の継続という観点からみれば、まず子どもとしての参加対象年齢を外れても、スタッフとしてすぐに裏方に参加できるステップが用意されていることが重要である。また発達段階が進んでも継続的に関わり続けられるためには、「自分もこうなりたい」と思えるような魅力的な大人にサポートされていることも組織として必要といえるだろう。

３-３　2023年度の様子

（１）スタッフの参加について

2019年より後はコロナの影響により、しばらく開かれることがなかったが、2023年８月19日、20日の２日間、250人の規模に縮小して開催された（図２）。また、毎回「まち」の開催前には、オープニングのような形で参加者全員が集まり、遊び方の説明等がなされるが、今回はそれらが実施されないスケジュールとなっていた（図３）。そして「まち」に出店される様々な店や施設なども、いつもは55ブースあるが、今回は44ブースと、その数を減らしていた（図４）。主催者によれば、今回は関わる学生スタッフの参加が少なかったようだが、４年前の2019年に子どもとして参加していた者が、スタッフとして戻ってきている様子がうかがえた。2019年の

図３　2023年度「とさっ子タウン」のスケジュール

図４　2023年度「とさっ子タウン」のブースマップ

表2　2023年度「とさっ子タウン」スタッフへのインタビュー

属性			4年前・2019年の参加	Q1.子どもの時、いつ参加したか。	Q2.インタビューメモ（①いつから参加しているか、②子ども時代の様子はどうだったか、③今年の様子はどうか、④その他）	Q3.実行委員かどうか
1	スタッフM	高3･女	○	中2	①前回4年前の2019年に中学2年生として参加している。	当日スタッフ
2	スタッフN	大6･男	○	小4～中3	①小学校4年生から参加し、前回4年前の2019年は大学2年生として参加している。 ②子どもの頃は、「とさっ子タウン」の子ども市長を経験。 ④今回は、実行委員長として参加。	○
3	スタッフO	社1･女	×	中3	①中学校3年生で参加し、高校時代は裏方スタッフとしてボランティア参加、大学は県外のため不参加。 現在は社会人1年目として高知に戻って来たので、5年ぶりに参加した。 ④実行委員にも入り、税務署ブースをサポート。高校時代も同じブースでボランティアとして関わった。これからも、来年も関わっていきたい。	○
4	スタッフP	高1･女	○	小5、6	①小学校5年生から参加し、前回4年前の2019年は小学校6年生として参加している。 ②当時は子ども同士で遊んだのを覚えている。「とさっ子タウン」では、偶然、幼稚園の時の子と再会したり、ここで知り合った子もいる。お土産を買ったり、プリンも食べた。銀行でお金を数える方法を教えてもらったのが楽しかった。大人との関わりはあまり覚えていない。 ③今年の参加は中学生が多いイメージ。自分が遊んだ当時は小学生が多かったイメージ。今年から参加する子ども達が多いので、貯金がない。これまではお金持ちの子が「まち」に沢山いた。 ④今回は当日スタッフとして関わり、税務署ブースをサポート。ここでは、知らない子たちと何かをすることが楽しい。来年も来たい。	当日スタッフ
5	スタッフQ	高2･男	×	×	①今回、当日スタッフとして初めて参加。高校の担任の先生に勧められた。小学生の時は参加したことがなく、このイベント自体も知らなかった。 ④ここは、他校の高校生とも話ができて楽しい。とさっ子ピックのブースをサポート。ここでは働きに来た子に遊び方を説明し、このブースに遊びに来た子に説明できるようにする。最初は遊ぶ料金が10トスだったが、少し高いかもしれないと思い、6トスにしたらどうかと意見を述べたら、それが通った。また、1日目に一人で記録を出す子がいたので、玉入れのブースを作ってワンバウンドさせないといけないなど、ルールも変えた。意外と意見を言うとそれがとおる。	当日スタッフ
6	スタッフR	高1･女	○	小4～6	①小学校4年生から参加し、前回4年前の2019年は小学校6年生として参加している。 ②子どもの頃、「とさっ子タウン」では、お金を稼いでいたのを覚えている。家で作って来たアクセサリーで起業してお店を開設した。 ④お母さんがスタッフとして関わっている。来年も参加したい。	○
7	スタッフS	社1･男	○	小4、5、中1～中3	①小学校4年生から中学校3年生まで参加し（小6は不参加）、高校1年生で当日スタッフとして参加。前回4年前の2019年は、高校2年生で実行委員として参加。専門学校時代の2年間は不参加。 ②子どもの頃、「とさっ子タウン」では、食のブースにいて楽しかったのを覚えている。他にもバーの仕事や、お弁当工場も。弁当プロジェクトがきっかけで実行委員に入り、ユニットに入った。	○
8	スタッフT	高3･女	×	小5～中1	①小学校5年生から中学校1年生まで参加。高校1年生から実行委員として参加。 ②子どもの頃、「とさっ子タウン」では、清掃局、選挙管理委員会で働いたのを覚えている。 ③今年は人が少ない。自分が子どもの頃参加したときは、ハローワークや銀行、郵便局が混んでいたイメージ。 ④実行委員をしてみようと思ったのは、楽しそうだったから。やってみて疲れたけど来年も参加したい。	○
9	スタッフU	高1･女	○	小4～6	①小学校4年生から参加し、前回4年前の2019年は小学校6年生として参加している。中学生の期間は、コロナ禍で参加できなかった。 ②子どもの頃は起業してカードゲームで儲けた覚えがある。	当日スタッフ

調査のように子ども時代に遊んだ経験をもつ者を見つけてインタビューしようとしたが、４年ぶりの開催は学生として関わるスタッフの顔ぶれも変わり、対象者を見つけることが難しかった。また少ないスタッフ数で運営されていたことから、インタビュー時間をしっかり確保することは難しかったが、時間のとれそうな高校生・大学生の若手スタッフに声をかけ、今回の参加状況についてのインタビュー調査を行った。

主に、いつから参加しているか（Q２①）、子ども時代の様子（Q２②）、今回の様子（Q２③）などについて尋ねた（表２）。インタビュー調査者９名（高校生６名・大学生１名・社会人２名）のうち８名が子ども時代に「とさっ子タウン」で遊んだことがある経験者であった。４年前の2019年も６名が参加しており、そのうち２名が高校生や大学生としてスタッフの立場で、残りの４名は小中学生として子どもの立場で参加していた。

なぜスタッフとして参加したのかについては、高校の担任の先生に勧められたり（スタッフQ）、親がここに関わっていたり（スタッフR）、スタッフとして関わるのが楽しそうだと思ったり（スタッフT）と、様々なきっかけが存在することが明らかになった。しかし、そのような入口があっても、スタッフの立場としての「関わり甲斐」がなければ、継続することは難しい。本調査では、なぜ参加が継続していくのかその予兆を掴むことができた。例えば、＜スタッフO＞のように現在は社会人として関

わっているが、高校生の時も同じ「税務署」のブースで関わっていたことから、「ただいま」といったような帰ってくる感覚があることがうかがえる。「とさっ子タウン」は毎回設定されるブースや仕組みが大きく変わることはないため、そのブースに前回と同じ専門家スタッフがつくことも多い。１年に１度ではあるが、「共に」「再び」「まち」を創る場となっていることが考えられる。

また、ハード面としての仕組みは毎年大きく変わらなくとも、当日の運営時にはスタッフの様々な工夫や配慮が加わって「まち」が創られていく。＜スタッフQ＞のように、自分が関わるブースに改善案を提示すると「意外と意見がとおる」という感覚を得ているように、スタッフとしての「こうした方がいいかな」という創意工夫の行動は、子ども参加者とは異なるスタッフの立場として「とさっ子タウン」との関係性を築くことに繋がっていくといえる。

（２）スタッフの立場での「まち」づくり

各ブースで子ども達がどのような仕事をするかといった内容は、そこに配置されている専門家やスタッフによって決定されることが多く、「とさっ子タウン」は、大人の立場として様々に動ける「まち」ともいえる。例えば、図５にみるカーショップの模型は、「建築デザイナー」のブースにおいて子ども達が作成したものである。図３のスケジュールにもみられるように、２日目の午後には「建築デザインコンペ」の時間が設けられ、広場に集まった子ども達の投票により１位の作品が決められる。毎年、「とさっ子タウン」内の既存のブースをテーマに、建築作品がコンペで選ばれ、翌年の「とさっ子タウン」に等身大で出現することになっている。このようにして、開催当初の2009年より毎年１ブースずつ、子ども達の設計アイデアとコンペによる選択が形になるというサイクルを繰り返している。前回2019年度は放送局の建築作品コンペが行われ、今回４年ぶりの開催にあたり、その時の優勝作品が建てられた（図６）。

しかし2023年度はこれまでの企画とは少し異なり、まだ「とさっ子タウン」内に存在しない車屋のブースを、コンペ作品のテーマとした。これは「建築デザイナー」の専門家スタッフが車会社と繋がりがあることから、来年2024年度に車ブースが「とさっ子タウン」にできたらと想定し、大人が「まち」づくりを仕掛けたのである。この車屋の建築作品には12個の設計アイデアが集まり、図５に示す作品が選ばれた。

「ビルメンテナンス」のブースにおいても、専門家スタッフ側の工夫がみられた。ひと昔前までは、会場のガラスを拭くなど「掃除体験」的な仕事内容であったが、実際に「とさっ子タウン」内にゴミが出たり汚れが現れたりするこ

図５　2023年度「とさっ子タウン」のカーショップの建築コンペ

図６　2019年度「とさっ子タウン」の建築コンペで優勝した放送局のデザインの出現

図７　「プリン屋」ブースの端に置かれている「花屋」の花（2023）

とから、リアルに掃除する仕事へと変わったという。「とさっ子タウン」の通貨はトスであるが、５トスを各ブースに払ってもらう形で掃除をするシステムである。例えば、「建築デザイナー」のブースでは、模型作りなどにおいてゴミが出るので、依頼をすると机上の掃除をしたり、アルコールで拭いたりしてくれる。

また「花屋」ブースで依頼をすると、床の掃除をしてくれるなど、場所の特性に合わせて掃除を実施してくれる。子ども達はここに来ると、60分という仕事時間の中で、宣伝のためのチラシを作成して配布したり、注文を受けて実際の掃除に行ったりする。各ブースがこの「ビルメンテナンス」のブースに依頼をして５トス支払えるのは、事前に準備金30トスが与えられているからでもある。そしてそのお金は専門家やそのブースのスタッフの裁量により使われていくことが多く、このように店の資金をどう使うかによって「まち」が回る仕組みになっている。子ども達がその資金を使えるところまで関与できることが理想ではあるが、大人が陰で「まち」を動かす機会になっているともいえる。

この準備金により「まち」が回っている事例としては、「花屋」ブースの花の販売がカフェなどの飲食エリアで行われていたり（図７）、「マンガ家・イラストレーター」ブースで働きに来た子ども達が描いた４コマ漫画を新聞社に買ってもらったり、「市役所」ブースでは「とさっ

図８　「市役所」ブースの奥に掲示されている「とさっ子タウン」の新聞（2023）

子タウン」の新聞を購入し、ブースの奥に掲示するなどがみられた（図８）。「市役所」ブースの専門家スタッフによれば、「準備金があるので売りに来たら何でも買ってあげるようにしている」とのことであった。

４．考察及びまとめ：「とさっ子タウン」にみる郷土獲得の可能性

日本の「こどものまち」は、2002年に千葉県佐倉市「ミニさくら」より継続実施されてから20年ほど経つ。これまでの「こどものまち」の20年は、子どもの声に耳を澄まし、子どもがいかに主体的に活動できるかを、「こどもがまちをつくる」遊びの世界を舞台に具現化してきた。しかし、20年を経た今、参加対象年齢を卒業しても関わり続けようとする経験者が増えてきている。彼らは、「こどものまち」が大事にしようとしている、子どもの声に耳を傾ける姿勢を子ども時代に体感している貴重な存在である。これから20年先の「こどものまち」は、ここで育ったり関わったりした若者世代が活躍する時期でもある。「こどものまち」の理念がより良い形で広まっていくためにも、子ども時代に参加したことがある経験者が、「あの時を思い返す場」として戻ってこれるようなポジションを準備しておくことや、スタッフ側になっても関わり続けたいと思える魅力的な場づくりが必要である。そして、どの世代にとっても「こどものまち」が継続的に楽しく関われる場であることが望まれる。

そのためには本稿の「とさっ子タウン」にみたような、大人が関わる余地を残しておくことがヒントの１つとなる。「こどものまち」における大人スタッフが、安全を見守るだけであったり、子どもの意見を尊重するあまり自分の意見を我慢し過ぎたりするなど、「まち」に対して消極的な立場で関わるのではなく、「まちづくり」や「店づくり」に対して何らかの自分の意思を表明し、共に子どもと遊べるかがポイントとなることが考えられる。それが自分にとって大事な場所という、「まち」と自分なりの関係性（紐帯）を結ぶ機会となり、大人の立場になっても「こどものまち」において、「郷土」を獲得することに繋がっていくといえる。それには、ロジャーハートの「子どもの参画」[7]の理論で提示されているような「大人社会のプログラムに子どもがどのように参画していくか」ではなく、その逆も設計する必要があると考える。つまりそれは、「子どもの遊びのプログラムに大人がどのように参画していくか」という子どもと大人の「遊びの共生」を目指すことでもある。

ドイツの「遊びの都市ミニ・ミュンヘン」では、スタッフは有償ボランティアで参加するが、

日本の「こどものまち」は無償で関わっている人が多い。その無償性が批判されることもあるが、日本の「こどものまち」は、学べる何かがあったり、成長できたり、地域で育つ誰かを見守ることができたりと、お金には換算できないものを得られる場として関わる人々に見い出されている。それは「人間的なつながり」や「生き甲斐」など、より良く生きるための生活資源でもある。したがって人々が「こどものまち」に関わり続けることは、「自分にとって大事な場所」という資源を、耕し続けているといえる。そして子どもから大人までが関わり皆でその資源を耕すことで、「自分にとって」という単独の郷土性だけでなく、「自分達にとって大事な場所」という共同の郷土性の獲得に近づく機会ともなりうる。本稿でみてきた「とさっ子タウン」は、ここに関わる若者を育てるという目的が多世代の継続的な関与を促し、結果的に皆が共同の資源（共同の郷土性）に向かうことに繋がっているのではないだろうか。このような共同の郷土性が各「こどものまち」にどのようにみられるかの詳細の検討は、今後の課題としたい。

参考文献

[1] 木下勇ほか編著『こどもがまちをつくる遊びの都市―ミニ・ミュンヘンからのひろがり』（萌文社）2010年

[2] 新村出編『広辞苑』第７版、岩波書店、2018

[3] エドゥアルド・シュプランガー著、岩間浩訳『小学校の固有精神』（牧書房）1981年、p. 13（Der Eigengeist der Volksschule1955）

[4] 「とさっ子タウン」ホームページ
https : //tosacco-town.com/jikkoiinkai/
（2023年９月20日閲覧）

[5] 「とさっ子タウン」ホームページ前掲URL：ホームページによれば、下記のような人材育成を目指していることが提示されている。
「特徴として、実行委員会の代表を大学生や高校生といった学生が担っています。「とさっ子タウン」という場を通して、参加する子どもの成長はもちろんの事、運営する学生の人材育成も目的としています。…略…開催から10年が経過した現在では、元とさっ子タウン市民だった子どもが高校生・大学生になり、ボランティアスタッフや実行委員として参加をしてくれています。」

[6] 花輪由樹「「遊びの都市」の継続的関わりが住まいの教育にもたらす効果」『令和元年度山梨県大村智人材育成基金事業報告書』（山梨県）pp. ６-７
https : //www.pref.yamanashi.jp/shigaku-kgk/omura_project/r1seika.html
（2023年９月20日閲覧）

[7] ロジャーハート著、木下勇ほか監修、IPA日本支部訳『子どもの参画』（萌文社）2000年

（謝辞）
本研究はJSPS科研費20K13798の助成を受けたものです。